

生と死を考える試み — 保育者養成において その 2 —

尾 上 明 子
中 根 淳 子

I 緒言

近年、様々なメディアで、児童の虐待による死亡、凶悪事件による死亡、あるいは逆に児童が加害者となる事件の報道を頻々と日にするようになった。文部科学省は、長崎、新潟三条市、富山県福光町などの児童生徒が関与した事件を受け、児童の問題行動対策重点プログラムとして、①命を大切にする教育、②学校で安心して学習できる環境づくり、③情報社会の中でのモラルやマナーについての指導の在り方の3点を最終的にまとめた。そのうち、命を大切にする教育は、子どもたちが①かけがえのない命を大切にする心を育み、②伝え合う力を高め、望ましい人間関係をつくる力を身につけ、③生きることの素晴らしさを体験活動を通じて実感できるようにすることが重要であるとされている¹⁾。しかし、高度に緊急性があるにもかかわらず、その問題への具体的方策が浸透してくるまでにはかなり時間がかかるものと思われる。学校関係者はできる小さな試みからすぐに始めていかなければならない。本学の学生は、将来、生命を尊重する教育の推進に携わっていく立場である。しかし、残念なことにほとんどの者が、これまでも何らかの場面でそのような教育を受けてきたにもかかわらず、それらを統合して自分なりの「生」「死」についての成熟した概念を形成しているとは言いがたい。実際に保育現場、教育現場に立たされたとき、「生命を尊重する教育」の必要性は痛感していても、体系的に教えられていないものをどうやって子どもに教えたらいのか途方にくれてしまうだろう。平成 16、17 年度の保育学会では「生」「死」をタイトルに含んだ発表は合わせて 9 件、保育者養成に於ける生と死の教育について触れたものは筆者らの先行研究のみであった²⁾。前回、われわれは、保育者養成校において生死に関連したテーマで授業を行って

る学校の先行研究が少ないことを述べた³⁾。前上智大学教授のアルフォンス・デーケンによる「死の哲学」の講義は著名ではあるが、前述したように本学保育科学生は、主に乳幼児の保育者を目指す学生であること、全員に当てはまることではないが難解な理論の講義は好まない傾向があるため、同様の講義を展開することが必ずしも有効ではないと考えた。また、2年課程のため、時間割がタイトであることから考えて、受動的な聞くだけの講義を入れず、2つの講演を軸とし、それ以外は記述と小グループでの発表を含む、全5回の生死を考えるプログラムを展開した。プログラムの目標は生と死について考える動機付けとすることに設定した。プログラム第5回では全体の振り返りの記述を行ったが、自分自身の生死、大切な人の生死についての記述が得られたものの、将来保育者になった時に会う子どもの生死に関する記述や、自分たちが生死を教える立場になることへの気づきはなかった。幼児期は、死の絶対性、普遍性の認識が確立される7歳くらいに至るまでの大切な準備期である⁴⁾。ダナ・カストロの著書『あなたは、子どもに死を教えられますか』を手がかりに、子どもへの死の教育を考えた工藤は、同様に、6歳前後をそれら概念の確立時期として、保育者が死の教育に関して特段の意識を高める必要があると述べている⁵⁾。そこで、われわれは、昨年引き続き、第2の試みとして前回の考察を踏まえながら、本学の学生に馴染み深い「絵本」を教材に取り入れた試みを行った。絵本を生と死の授業に取り入れる手法は新しいものではない。大瀬は、スーザン・バーレイの「わすれられないおくりもの」を用いた授業を行っている^{6,7)}。細谷も中学生むけの「生きることの喜びと意味を考える」という講演の中でこの絵本を引用している⁸⁾。また、古山は佐野洋子の「100万回生きたねこ」

生と死を考える試み

表1 生と死を考えるプログラム

| 日程 | 内容 | ねらい |
|--------------------------------|---|---|
| 第1回 6月23日 (90分) 34名出席 | 質問に記述式で自由に答える。その後、3つの教室に分かれグループワーク。 指導者各1名 | <ul style="list-style-type: none"> これまでの死生観を小動物やペット・身近な人などの「死」を記述することにより振り返る。また、話し合う（発表する）ことにより、自他の考えを知り体験などを共有する。 学生自身が「いのち」（生と死）を考えるときはどんなときか、また、現在「死」についてどのように感じているかを記述し、自分の現在の考えを認識したり確認する。 これにより研究者の対象者への理解を図り、プログラムの最終段階にどのように変化したかを知る手がかりとする。 |
| 第2回 6月30日 (90分) 36名出席 | 絵本の読み聞かせと「死」をテーマにした絵本の紹介 | <ul style="list-style-type: none"> 研究者がそれぞれ1冊、「死」をテーマとした絵本を朗読した後、感想を書くことにより、死への理解を深める。 また、多くの「死」をテーマとした絵本の存在を知ることにより、保育者として、子どもと共に「いのち」を考える足がかりを作る。 |
| 第3回 7月7日 (90分) 35名出席 | 畑野寿子さんの講演 | 長年の教会生活の中で、子ども（胎児）から老年までの多くの人の出会いの中で生と死に向き合ってきた体験談を聞く。特に、「胎児への語りかけ」の実践を聞くことによって死生観を深めていく。 |
| 第4回 7月14日 (90分) 33名出席 | 鈴木中人さんの講演 | 娘を小児がんで失った父親の話を書くことにより、生きることの意味、「死」とはどのようなことか、また「死」を通して生きるとはどのようなことかを考える。 |
| 第5回 7月21日 (90分) 28名出席 | プログラム全体への感想を書く | 5つの項目に記述することにより、プログラム全体を振り返る。これにより、学生自身の生と死（死生観）への気づきを表現させ、更なる理解を深めていく過程とする。 |
| その他の予定 | グループワーク（最終） | 5回のプログラムを通して得たことを、もう一度話し合うことにより分かち合う。更には「死」を通して生を考えることの意味を知り深める。 |

（巻末資料参照）を「生と死の教育」の中で用いている^{9,10)}。日野原は、中央教育審議会における意見陳述の中で『葉っぱのフレディ』などの教材を通じて死に関する教育を行うことも可能だ。この作品は、子どもに死を教えるだけでなく、子どもに『死とは何か』を教えられない若い親や、自らも死に近い老人のために書かれたものである。家族でこの物語に触れることで、『死の教育』（サナトロジー=thanatology）を易しく伝えることができる。」と述べている^{11,12,13)}。古田は、アメリカでは絵本を通して大切な家族（親）を失う危機に直面している子どもたちへのカウンセリングの教材として用いられている絵本を紹介している^{14,15)}。つまり、これらの試みにおける絵本の教材としての目的は、生と死の意味を主に児童生徒

に易しく伝えることである。しかし、保育科の学生にとって絵本はもう少し大きな意味を持っている。自分自身が将来、それを保育と教育に用いるものであるため、絵本全般に対する感受性が高いと思われること、小説や論文には苦手意識を示す学生が多いが、絵本を読む機会は非常に多いこと、大学生であるにもかかわらず、対象年齢が幼児向けのものをわれわれが教材として用いても違和感がないと思われることである。また、前回、生と死に関連した絵本30冊あまりを読破した学生が、読後感想として、「死についての絵本を全冊読破しましたが、その後湧き上がってくる気持ちは決してむなしさとか、生命に終わりが来ることの悲しさだけでなく、今生きていることの大切さ、周りの人が生きていてくれることに対する感謝で

した」と述べていたこともあり、今回は保育科の学生に対し、グループワークや講演、そして一部に絵本を教材として使用した「生と死を考える試み」の有効性を検討した¹⁶⁾。

II 研究方法

1. 対象

本学保育科2年生全員(179名)に研究主旨をプレゼンテーションし、自ら応募してきた学生36名(男子3名、女子33名)。

2. 方法

表1のように計5回のプログラムを設定した。正規時間割以外の空時間に設定し、出席者は表1の通りであった。第5回は実習の事前訪問期間だったため出席が少なかった。プログラムの内容は昨年度と同様に、生と死に関する学生の体験や考えの記述、話し合い、講演などであり、その他に、今年度は学生にとって日頃から親しんでいる絵本の読み聞かせを導入した。それにより、聞く側としての感想を含め、「死」に関連するテーマの絵本が、保育にどのように取り入れていくことができるかなど考えるきっかけを与えることをねらいとした。第5回では、それぞれの回の感想の記述、および、プログラム全体の振り返りに関して自由に記述させた。

結果の分析は、記述した人の意図を損なわないよう注意しながら、各質問ごとに記述者全員の文章をキーとなる短文や単語にした上で、類似性のあるものをグループ化し、各々のグループがどのような意味をもつかを分析した。第5回の分析ではグループに名称をつけた。記述すべてを単語まで分解しなかったのはたとえば、「心にドシンと響いた」を、「心」「響き」や、あるいは「心に響いた」にすると、学生のそのときの気持ちを損なってしまうように思われたからである。学生が「心にズシンと」でなく「ドシン」と表現したのはまさにそのような衝撃を受けたのだと思われる。しかし、分析は高度に統制されたものではなく、個人の主観により左右された部分があり、今後の課題である。

III 結果

1. 第1回質問紙の結果

表2 第1回 質問項目：自由記述

1. あなたは、小動物やペットの「死」を経験したことがありますか？ そのとき、どのように感じましたか？
2. あなたは、身近な人（親戚や友人・知人）の「死」を経験したことがありますか？ そのとき、どのように感じましたか？
3. あなたは、子どもの頃「死」について、どのように思っていましたか？
4. あなたがいのち（生と死）について考えるときは、どんなときですか？
5. あなたは、現在「死」について、どのように感じて（考えて）いますか？

1) 質問1

34名のうち回答数は、32名。ペットや小動物を含め、延べ35件の事例が書かれている。内容は、犬14、猫5、ハムスター5、ウサギ2、とり(雛)2、金魚2、インコ1、鈴虫1、めだか1、熱帯魚1、すずめ1、ねずみ1であった。実際の数はいくつと見てもよい。回答の中で、特筆できることは、ペットや小動物を問わず次のような表現がされていることである。「ずーっと一緒に成長した姉妹、家族だった」「家族の一員」「生まれた時から暮らした犬」「赤ちゃんの時から遊んでいたから、兄妹同様に感じていた」「妹のような犬」「生まれた時から飼っていたので姉のように思っていた」「妹のように感じていたハムスター」などである。これを見ると家族が長く大切に飼ってきたこと、家族同然に扱ってきたことがわかる。質問1を書き始め、あちこちで泣きはじめるという状況が起こった。一方、幼少時、「死」という事実が分からなかったり、ウサギや鈴虫の友食いを見る、殺鼠剤を誤って食べて死んだ猫の思い出など残酷・ショックとして印象付けられている者もいる。

2) 質問2

回答者33名中、全く経験していない3名を除いては31名が身近な人の死を経験している。そのうち、複数の経験者が10名であった。両親の内どちらかを亡くした者1、曾祖父母、祖父母を亡くした者25、親戚(赤ちゃん、叔父や祖父母の兄弟など)9、友人5、知人や高校の先輩、同

級生、友人の父親の死を経験した者などがあつた。

幼・小学時、身近で大好きだった祖父母の死について、死はほとんど理解できず、周囲の人、特に母親や父親の悲しみ、ショックなどを間近に見て、「もう会えない」と思った、葬儀で冷たい身体に触り恐怖やいろいろな感情が溢れる、死がよくわからず死んだらどうなると考えたなどがある。しかし、中・高校時になると、おばあちゃん子、おじいちゃん子ゆえに、死と向き合う辛さを述べている者が多い。中には倒れた日から死ぬ瞬間まで立会い、葬儀の際の親戚の言葉により、祖母の存在の故に自分が今あることを認識でき、その存在の大きさを知り、存命中にそのことがわかっていればと後悔している学生、大好きだった突然の祖父の死から、思い出とともに後悔で1か月笑うことができなかつたという記述もある。また、普段あまり接触がなかつたが、よくしてくれた祖母に十分な見舞いができなかつたことを後悔している者、保育士になる夢を応援してくれた祖母の死が辛く、会いたい、また、心停止の顔が忘れられないという記述もあつた。

死因の中でも、突然の事故2、自殺2は、頭の中が真っ白、ショックという表現によってその衝撃を現している。

3) 質問3

全く考えていなかつた6、分からなかつた・自分とは関係ないこと6、祖母や友人の死を経験するまでは、考えていなかつた3、無記載4を含めると計20におよぶ学生が、幼少期には、死については、考えていなかつたと記憶し印象が薄い。その反面、よく考えた2、とても怖い4があり、夜寝るときに父母に会えなくなるという不安を持ちよく泣いたというものもある。また、死は、天国へ行くこと4、人間は死なない2、空に昇って星になる1、祖父の死により、死にたくないと思つたなどがあつた。

4) 質問4

34名中、29名が回答。日常生活の中で、さまざまな機会に考えていることがわかる。幸せと感じる時、楽しいと感じるとき、逆に不幸だと感じる時や辛く関係を断ち切りたいとき、生と死に関する本を読んだとき、実習中、子どもから生のパワーを感じる時、メディアの報道を通して、

赤ちゃんの誕生・発展途上国の病人・貧困で食物のない人・虐待死・人の死・戦争・事故・自殺などを見聞することからとあつた。「よく考える」と述べた者の中に、自分の死後どうなるのかを常に考えている者、泣いてくれる人はいるのかなど過去にいじめなど辛い経験をして、生きている意味を考えると述べている者、誰かが死ぬ夢を見て恐怖を感じて起きるというものもある。親戚の子どもが幼くして亡くなり、生きたくても生きられない子どもがいると考えると虐待は許せない、また同時に元気だった祖母が加齢により薬漬けとなり体調不良となつたことから、「生まれてくることは同時に死ぬことでもある」という考えに至つた者もいる。

また、上記の自殺の報道に関して、一時の感情で簡単に死ぬのは恐ろしいこと、自殺は許せない、辛く悲しいとき、死を考えるがいろいろな人に支えられた自分は絶対に自殺をしない、人間関係の葛藤の中で実際に死のうとしたこともあるという者もいた。

5) 質問5

34名中、26名回答。死に関するネガティブな記述は非常に多く得られ、とても恐ろしい、恐いけれど仕方がない、不慮の死は悔やみきれない、逃れることができない、暗く深いイメージ、死にたくないし他者の死も耐えることができない、突然やってくるもの、とても悲しいもの、永遠の別れ、全く考えられない、生きているよりは楽なこと、何もなくなる、思い出したくない、などであつた。ポジティブな見方としては、死は怖いものとは思わなくなり以前と比べ客観的に見られるようになった、死があるからこそ今を大切にしたい、その人が生きていたことを忘れない、生きていることは当たり前ではない、いずれ来る死を受けとめることも大切、自殺はだめ、などがあつた。その他、よくわからないがとても大きいこと、身近に起こってほしくないこと、難しい、よくわからない、などがある。また、「誰にも死があることを考え、がんばらなければ。今、生きていることは当たり前ではないことをきちんと理解し、命を大切にしなければならない。多くの人が悲しむことには変らない。死が多くの人々の人生を変えてしまう」「人が悲しみ、傷つく。やり直しがきかな

い。相手がいないと考えると恐くて仕方がない。周りの人の死は自分の死より恐ろしい。周りの人の死は思い出したくないくらい辛い。生死のはざままで精一杯生きている人は、本当に強い人。その人の感じる死ぬことの辛さや生きる喜びを少しでも理解することができれば嬉しい。死について考えることは難しいが、精一杯生きようとしている人を精一杯励まし、力になりたい」「精一杯生きている。死ぬとき自分の人生がすばらしかったと思えるように生きて生きたい。しかし、大好きなペットの死を想像すると、不安でそのことから逃げ、違うことを考えてしまう。まだ、死について考えることができない」などの記述があった。その他、「なんとなく生きており、死という言葉が軽く思っている自分が情けない。授業を通して、深く考えていき、生きていることに喜びを感じられるようにしていきたい」という記述もあった。

2. 絵本の読み聞かせ

本年度の研究では、死をテーマとする絵本(下記)の読み聞かせを新たに実施した。目的は、本学が保育者を養成する機関であり、子どもの命を預かり向き合うという重要な使命を持っており、生と死を考える上で絵本が有益な教材となるという気づきを提供したいと考えたからである。同時に、現在、筆者および本学が所有するもの、新たに収集した多くの絵本を紹介した(巻末資料参照)。読み聞かせに使用した2冊の絵本のあらすじを合わせて記す。

1) 「ずーと ずっとだいすきだよ」について

絵本全般にわたる感想は、「絵があたたかく、すんなり入ってきた。主人公は死を悲しんでいるだけでなく、ぼくなり受け入れていることが伝わった」「以前にも何度も読んだ本。この絵本はどんなものにも死が必ずあるということを伝えている」「生まれた時から、自分の側にいた犬が死んでしまうということは、悲しいはずなのに、男の子はそれを受けとめていたことがすごいと思った。そして、次に飼う動物にもずっとずっと大好きだよって言ってやるんだという言葉聞いたとき、この男の子は本当にやさしいんだ、エルフィーも幸せだろうと思った」など主に、主人公と犬の関係を通しての記述であった。自分の体験と結び

つけた記述は、次のように一番多い。「犬を飼っていたとき、その犬に大好きだよということと言わなかったので死んだときとても後悔した。今、共に生きているとき、喜びを伝えることは大切だし、すばらしいことだと感じた」「小さい頃、大好きで何度も繰り返し読んだ。それで飼っていた犬も同じように死ぬのではないかと思い、いつも泣いていた記憶がある」「家で猫を飼っているが、自分が家族の中で一番長い間一緒にいる。猫に対してでも誰に対してでも、毎日後悔のないように自分が伝えたいことを伝えるようにしたいと思った」「生きているとき言えなかったことを後悔している。だからこそ、今周りにいる人に自分の素直な気持ちを伝えていきたい」「好きだよ、ありがとうという言葉が伝えられないまま何度も後悔してきた。精一杯、思いを伝えられたらいいと思った」などであった。

2) 「わすれられない おくりもの」について

絵本全般については、「語り合うことで癒されることもわかった」「死んでしまったら、すべてが終わりなのではないことがよく伝わってきた。(中略)教えあったり、様々な経験をすることで人の心に残り、生きる支えになっていくのだと思う」「初めて知った絵本。アナグマさんは年老いて自分の死が近づいていることを知っていたが、みんなから愛されて死んでいった。だから、動物たちは、最後に『さよなら』よりも『ありがとう』と一番言いたかったのだと思う」「大好きな人が死んでしまった悲しみは、いつまでも残ってしまう。でもその人が残してくれたもののすばらしさ、大切さは生きる希望になっていくように思う」「死ぬことをトンネルの向こうに……と抽象的に言っていたので心があたたかくなった。その人との思い出は、体が無くなっても心は残ることかと思う」などであった。自分の体験と結びつけたものは、「家族全員で祖母を介護していたが、めんどくさいと思いつつやっていた。祖母がいなくなってから、存在の大きさに気づいた。多くのことを教えてもらったし、やってもらったのに、どうしてそんなことを思ったのか自分が嫌だった」「自分にも大切な人がいるが、いつかアナグマのようにいなくなると思うとゾッとすると、恐ろし

い。もし、そんな体験をしたら、いつか楽しく思える出話ができるようになるのかなと思った。アナグマは、幸せだったと思う。「アナグマの生き方はすごい。私もこんな風に生きられたらすばらしい。」「私も誰か一人がいい。死んだとき、思ってくれる人がいればいい。そう思ったとき、毎日精一杯生きたいという気持ちになった。そうして、旅行にでも出かけるように、長いトンネルの向こうに行けたらいいな」など自身の体験とともに、アナグマをモデルとして捉えている記述が多いが目立った。また、自分の祖母との思い出は辛く寂しく、残された動物たちの気持ちがよくわかったが、この絵本でとても励まされたという者、友人との関係で自分の存在について悩んでいるが、伝えたいことをちゃんと伝え、覚えていてもらいたいなど切実な感想もあった。

① 『ずーっと ずっとだいすきだよ』ハンス・ウィルヘルム（絵と文）久山太市訳 評論社 1988年
主人公のほくと仲良しのエルフィーという犬は、一緒に大きくなった。年月がたち、主人公は背が伸びるが、エルフィーは太って動作が鈍くなり、どんどん弱っていく。ある朝、目覚めるとエルフィーは死んでいた。主人公は、深い悲しみにくれるが、生きていたときエルフィーに「ずーっとずっとだいすきだよ」という言葉をいつもかけていたから、いくらか気持ちは楽だった。

② 『わすれられない おくりもの』スーザン・パレイ（絵と文）小川仁央訳 評論社 1986年
かしこく、みんなにたよりにされているアナグマは年をとって、自分の死が遠くないことを知っていた。ある日、みんなに「長いトンネルのむこうにいくよ……」という手紙を残して死んでしまう。残されたみんなは、冬の間中悲しみ、途方にくれる。しかし、春が来て、外に出られるようになるとみんなは行き来して、アナグマの思い出を語り合った。語り合うとアナグマの残してくれたものの豊かさでみんなの悲しみが消えていき、アナグマにお礼が言いたくなった。

科を卒業。約60年間、教会学校教師を続けている。自分の子どもだけの親にはなってはならないという神の声に従い、助けを必要とする人々に仕え、子どもたち、母親、年齢を超えた多くの人々に神の愛を伝え続けている。特に17年前より、胎児を一人の尊い人格者として語りかけ、いのちの誕生という神秘を両親と共に喜びのなかで待ち望みながら、神の愛の豊かさを伝えている。また、多くの「死」にも立ち合い、貴重な経験を数多く持っている。

〈講演要旨〉

生まれてきたものは必ず死ぬという厳粛な事実がある。人の意志を超えた意志があり、死はいのちを造られた方のところへ帰ること。しかし、自分のいのちをコントロールできるとする悲しい事実が多い。今朝のNHKで「総合学習」を取り上げ、小学2年生がオス・メス2頭のやぎを育てていた。やぎの赤ちゃんが生まれる瞬間、子どもたちは喜ぶと思ったが、なんと全員が感動の涙を流していた。いのちを実感することはすばらしい。

聖書には、胎児という表現が多くある。胎児は5か月から聞くことも、また考えることも出来るりっぱな人格である。子どもたちに聞くと、胎児期の記憶があり、分娩室のシートの色を覚えていたり恐かったという子どもがいる。妊婦の母親が亡くなったとき、胎児が悲しみを共有するかのようには動かなかったという事例もある。

このような繊細な子ども（胎児）に一人ひとりテープを作り語りかけている。その瞬間とてもやさしくなれる。胎児は、歌が好きで、好きな賛美がある。生まれてからも、お腹の中で聴いていた歌が好きである。子どもの母親だけでなく父親も胎児を囲み、新しい生命への認識が深まる。第1回胎児クラスの子どもは、今高校生で、17年間で100人になるとうしている。その中で一人の子どもが生まれてすぐ神のもとに召された。父親は、小さい棺を前に、妻は10か月という期間を大切に育ててくれましたと言った。それは、いのちの証である。一人は、言語障害を持っていた。しかし、すばらしい微笑みを持っている現在中学生。どんなに怒っていても、その子の前に行くことができない。なかなか病名が分からなかったが、後年エンジェル症候群ということがわかった。

死に立ち合うことは、願っていたことではなかった。保育者であった時代の教え子（保育園主任）が末期がんで亡くなった。最後まで子どもへ愛を惜しまず、神を賛美しながら生き抜いた。また、孤児と

3. 第3回・第4回 講演要旨

1) 畑野寿子さんの講演要旨

〈畑野さんのプロフィール〉

1925年生まれ。尼崎市在住。平安女学院保育

して育った同年輩の方を看取ったが、子どものように甘え、今が一番幸せと言って亡くなった。若い聖職者の死も壮絶であった。死を受け入れることの難しさに苦闘する手紙が来た。絵本「わすれられないおくりもの」にあるように、死は終わりではなく、新しいいのちの始まりである。死を突き抜ける〈希望〉がある。私は、死んだとき亡骸を子どもたちに見せて欲しいと遺言している。死の現実とともに新しいいのちに生きることを伝えたい。また、親が子どもの魂を殺す「この子さえいなければ」という言葉を発すことは絶対いけないと話している。(著書「み手のなかで」、「新しいいのちを祝う」「愛された記憶の大切さ」「心に愛を伝えるメッセージ」などのプリントが配布された。)

2) 鈴木中人さんの講演要旨

〈鈴木さんのプロフィール〉

1957 年生まれ。豊田市在住。1992 年、当時 3 歳の長女景子ちゃんが、突然「神経芽細胞腫」と宣告される。1995 年、闘病の末、景子ちゃんは家族に看取られ天国へ召された。後に鈴木さんは、「がんの子どもを守る会」の活動を始め、現在は評議員、および東海支部代表幹事をつとめている。「いのちをバトンタッチする会」代表。著書に「景子ちゃんありがとう」(郁朋社)「いのちのバトンタッチ」(致知出版)がある。

〈講演要旨〉

はじめに「現在、小児癌の子どもたちはどれくらいいると思いますか?」「日本の自殺者の数はどれくらい?」などのクイズをする。1992 年、当時 3 歳の長女、景子ちゃんが「神経芽細胞腫」と診断され、頭の中が真っ白になるような強い衝撃を受けた。最善の治療を受けさせたいという願いの中で、景子ちゃんに入院のことを話すと、自分のことより家に残される弟の心配をした。闘病中「私、死んじゃうの?」と質問した。3 歳でも死を本能として直感していると感じた。それ以来、治療のことなどは景子ちゃんによく説明をした。景子ちゃんは、多くの人の善意によって輸血用の血液が病床に届けられることを聞くと、バックに向かって「ありがとう」とお辞儀をするような子だった。94 年 3 月、保育園に入園。少しずつ状態がよくなり、最終的な検査を受けるが、その段階で脳転移が判明した。親としてできること、それは、輝きのある価値ある日々(特別なことをするのではなく、なるべく普通の生活を送ること)を送らせること、苦しませずに看取ることであった。95

年、入学式を迎える。5 月、全身に転移し、毎日輸血が続く。苦しい闘病生活の中で景子ちゃんは懸命に学校に通った。書写の宿題は、1 字書くのに 5 分・10 分を費やしたが「治って学校に行ったとき困るから」と最後まで希望を失わず努力した。95 年 7 月 5 日家族が見守る中、天に召される。景子ちゃんを殺してしまったという強い罪責感を持ったが、看護師の「愛情いっぱい両親の元で景子ちゃんは幸せだったのでは」の言葉に救われる。

このような経験を通して、生き抜き輝きたいのちはバトンタッチされて伝えられることを実感した。また、「いのちを支え合う」ことは、強い人が弱い人を支えるのではなく、お互いに一人一人、かけがえのない存在として認め合うことではないか。「絶対に親より先に死んではいけない!」と若い人たちに強く伝えたい。

(最後に、話の中で印象的だった言葉を書き、順番に発表。「ありがとう」が多かった。)

4. 第 5 回の結果

表 3 第 5 回 質問項目: 自由記述

これまでのプログラムについてあなたの感想を番号順に書いてください

1. グループワークについて
2. 絵本を用いたワークについて
3. 畑野さんのお話について
4. 鈴木さんのお話について
5. 全体を振り返って

1) 質問紙とグループワークへの振り返り

グループワークに関する振り返りでは〈普段話さないことを話す〉ことに関して触れた者が多く、気持ちの整理ができた、真剣に話せた、針が一本抜けた、ずっと話していたかった、などの記述があった。話すことだけではなく、参加者の話を〈聴く・聞く〉ことについて触れたものは、自分にはない視点や、自分のしていない体験について聞くことができたという記述が得られた。〈死のイメージ〉に関する記述では、悲しみ、別れ、恐怖、喪失感、後悔、しまいがちなものなどの言葉を用いていた。また、グループワークにより、〈共感、共有、共通、同じ気持ち〉と述べた者が多く、身近な死を体験していない学生も話し手と同じような気持ちを抱いたという感想や、自分だけではなかったという共通性を見出した者、あるいは積極的に支持されたうれしさを述べている。また、グ

グループワークを、初めて生死について考えた、あるいは、母と話して自分の生に関する母の考えを知る〈きっかけ〉となったと捉えた者がいた。また、忘れていた人の死を一気に、あるいは昨日のように〈思い出す〉ことにつながり、思い出せてよかった、思い出すことは必要、と述べたものもいたが、逆に思い出して辛かったと述べた者もいた。グループワークを経て、人間は辛い体験を乗り越えて生きていくもの、皆悲しみを背負っている、毎日を大切に生きたいなどの〈気づき〉があった者もいた。

2) 絵本を使った授業への振り返り

幼児に生と死をわかりやすく〈伝える必要性〉を記述した者が多かった。子どもが何らかの死に遭遇したときに読みたい、命を大切に子どもになるために、といくつかの目的があげられていた。中には実習中、死んだおたまじゃくしを保育者が「永い眠りについて」と子どもに教えた場面に遭遇したことを引用し、子どもがおたまじゃくしは眠ったまま埋められたと解釈した恐れがあること、おとなが死についてきちんと教えるべきだと述べた者もあった。死をテーマにした絵本の特徴に関する記述として、言葉が深い意味を持つ、恐くない、あたたかい、おとなにも考えさせることができる、自分の経験と重なるなどの記述が得られたが、中には子どもでも気持ちが重くなるような絵本もあるという意見もあった。保育者となった時の〈絵本の使い方〉に言及したものは少なかったが、いつ、どのような時に読んだらよいのか、という疑問や、子どもに怖いと思わせない本が効果的、動物や高齢者を通して、自然に生と死を教えたい、保育園で飼っている動物の死などをきっかけに読んだらよいのではという意見などがあった。第2回のプログラムを通しての〈気づき〉も、死をテーマにした絵本がたくさんあることを知って驚いたという記述が多数あり、そのほか、おとなが死を避けてはいけなく、今からの生き方を考えさせられるなどがあった。〈死のイメージ〉としては、死は終わりではない、人の心に残るなどがあった。

3) 畑野寿子さん講演の振り返り

畑野さんの講演の感想は、優しい、元気、パワフル、感謝に溢れた人など、演者自身の〈人柄〉に関する記述が多かった。また、「母ちゃん」と皆から呼ばれている畑野さんのようになりたいという記述が非常に多く得られ〈将来のモデル〉と明確に記述した学生もいた。しかし、2名のものが、母ちゃんの子どもになりたい、母ちゃんと呼びたい、と記述した。畑野さんの講演による〈気づき〉としては死にゆく人のそばにすることが大切、死は悲しみばかりでなく多くのものを与えてくれるなどの記述が得られた。〈感動したエピソード〉としては、ヤギの出産、胎児教室、がんを患った牧師さんの話などであった。

4) 鈴木中人さん講演の振り返り

振り返りを分析すると、〈鈴木さんの人柄〉、〈景子ちゃんの生き方、人柄〉、〈共感〉、〈同様の体験〉、〈気づき〉、〈変化〉、〈鈴木さんからの強烈なメッセージ〉についての内容に分類された。特に〈共感〉とタイトルをつけたものの中には、鈴木さんの話がリアルに伝わり、鈴木さんの受けた衝撃や景子ちゃんの苦しみが伝わったという表現や、男性であるため鈴木さんと自分を重ねて聞いていたなどの記述があった。最も多く記述されていたものは〈気づき〉に分類されたもので、家族も景子ちゃんから教えられたこと、景子ちゃんからももらった幸せがある、生きてくても生きられない人がいることを考える時、自殺は間違っているのではないか、病気を持つ人だけではなく、すべての人が命を輝かせて生きられたら、など多くの記述があった。そして〈変化〉には、実際に、講演後に親と長時間話をしたと述べた学生や、家族との関係を見直したい、私は自殺しない、死の悲しさと同時に生きる喜びを感じた、命を大事にしているか考えさせられた、などの記述が得られた。また、特記すべきものは鈴木さんが最後に繰り返し述べた「絶対親より先に死んではいけない」という〈強烈なメッセージ〉に対する反応である。ドシンと心に響いた、心の奥底に響いた、心臓が痛くなった、心に残り忘れてはいけないと思った、とても重い言葉、大切にしたいなど表現は異なるが多くの学生が記述していた。

5) 全体への振り返り

5 回の内容を分類し、名称をつけると〈死への思索〉〈生とは、死とは一現時点での解釈〉〈今からの生き方〉〈感謝〉〈分かち合うことの大切さ〉〈保育者となる自分のあり方〉〈希望〉〈プログラムの必要性〉〈プログラムの辛い側面〉となった。〈死への思索〉においては、生死に触れない生活をしていることに気づいた、死と向き合うことはなかった、話を聞いたり、一緒に考えたりすることで生と死の大切さを知ったなど、類似した多くの記述があった。〈生とは、死とは一現時点での解釈〉も、多くの記述があった。生の連続に死があり、その先は終わりではない、死によって気づくことがある、どう生きていくかが問題である、死とは悲しいものだけではないなどの記述が得られた。さらに「それぞれの人に様々な生き方があり、どんな人でも『死』と向かい合って生きている。生と死は切り離せない」と書いた学生がいた。〈今からの生き方〉においては、死を恐れなくて、この時間、一日、一日を大切に生きていきたい、死ぬという選択はしない、生きぬくことの大切さを感じた、自分を好きになろうと思った、自分を必要ないなどと思っはいけない、生きているからできることをしっかり考えて生きていきたいなどの記述があった。〈感謝〉においては、こんなにも自分が今こうして生きていることを感じたのは初めて、いただいた命に感謝、命を与えてくれたことに感謝、命があっても当たり前ではないなど多くの記述があった。〈分かち合うことの大切さ〉では、悲しみを一人で抱えていたが自分の弱みを見せてもよいとわかった、友人が自分のことをもっと知りたいと言ってくれたことがうれしかった、母親と授業（本プログラム）について話したが今までにないことだった、などがあげられた。〈保育者となる自分のあり方〉では、子どもの前に立つ前にこのような機会を与えられたことを感謝、命の大切さを子どもたちに伝えられる保育者になりたい、絵本などを使用して生と死について子どもたちに教えていけたらよいと思う、生の輝きを子どもにも伝えたい、また伝わるように何をしたらよいか考えたいなどの記述があった。〈希望〉は 2 名のものがそれぞれ、自殺・戦争・飢えのない世界になってほしい、自分の命に限らず人

の命・昆虫・自然界の生き物を思いやる必要がある、と述べている。〈授業の必要性〉においては、必修科目にしてほしい、もっとたくさんの人に聞いてもらいたい、来年も続けてほしいなどの意見があった。〈プログラムの辛い側面〉には、主に第 1 回目のグループワークに関し、辛かった、辛く悲しい授業だったと述べた者がいた。しかし、学生は 2 名とも但し書きで、死についてじっくり考えられたことは良かったと述べている。

IV 考察

1. 導入としての質問紙とグループワーク

プログラムに入る前に、プログラムのねらい、プログラム全体の内容（資料あらかじめ配布）、参加は強制ではないが、なるべく 5 回参加してもらいたいことを述べ、その後、第 1 回プログラムでは質問紙への記入と、グループワークを行った。第 1 回はプログラム全体への導入目的があり、そのため書きやすいと思われるペットの死に関する質問を始め、前回とほぼ同じ内容の項目（Ⅲ 結果、1. 参照）とした。ところが、前述したように、記入の途中で一人の学生が泣き出し、それに連鎖するように 2 名の学生が泣き出した。1 名は幼少の頃の父親の死、1 名は祖母の死、もう 1 名はペットの死に関連していた。前回は記入が終わるまでトラブルはなかったため、我々はこのような事態を予測していなかった。無理に書かなくてもよいこと、部屋から出てもよいことを説明したところ、少しの間、退室して休憩するものもあったが、全員復帰して記入を終えた。このようなプログラムに入る前には、オリエンテーションのみでなく、できれば個別の面接を通して内容への同意を得るべきだったと思われる。たとえば、ペットの死、身近な人の死に関する記入をしてもらうことを説明し、思い出すと辛くて耐えられないという人は、無理に参加したり記入したりしなくてもよい、あるいは、持ち帰って書いてもらうなどの配慮をすべきであった。ペットの死に関する記述を導入に使うことは、高校生対象の熊田、中学生対象の天野や小学校高学年対象の得丸の記述にも現れ、得丸は「身近な人の死と私」「大好きなペットの死と私」など 5 項目から選択させて作文を書かせる手法を用いている^{17, 18)}。選択される率

もペットの死が最も多い。ところが、デーケンは、見過ごされやすく公認されない悲嘆の一例としてペットの死をあげ、ペットの死は飼い主の心を深い嘆きに陥れ、さらに周囲の人がそれに冷たい反応をすると悲嘆が助長されると述べている¹⁹⁾。また、カリフォルニア開発的カウンセリングハンドブックにおいては、喪失の影響力を左右するのは喪失の大きさではなく、個人の主観的反応であると述べている²⁰⁾。これにより、書きやすいと思われたペットの死に関する記述は、それを経験したものにとっては、非常に大きな心の傷に触れられた結果となってしまった。回収した記述からも、特に幼少の頃からともに育った犬などは、ペットという感覚よりも、兄弟姉妹、つまり家族同様の愛情を感じていたことが述べられ、その喪失感が大きなものであることがわかった。また、プログラム第2回の絵本の読み聞かせの感想からも、特に「ずっと ずっとだいすきだよ」は結果に述べたように、自分の経験に照らし合わせ、ペットの死に対し罪悪感を持っていた者が多かった。導入として記述を用いる場合、デーケンの「死への準備教育」の中で用いられているような、「もし、あと半年の命しかなかったら、残された時間をどのように過ごすか」という自分自身の死について考えるほうが適しているのかもしれない²¹⁾。デーケンは、ほとんどの学生の記述からは、自分の生に意義を与えようとする積極性が読み取れたと述べている。

身近な人の死に関して、思春期は交差するすべての年代の死と出合う世代と言われるように²²⁾、父親、祖父母、曾祖父母、叔父、幼いところ、その他の親族、友人、近所の知人を亡くしている学生が多く、経験がない者は、結果に述べたようにごくわずかだった（対象者で既婚者、子どもを持つ者はいなかった）。葬儀を通じて、故人の存在ゆえに自分の生があることを認識した学生がいる一方で、近い身内を亡くした者は、1か月笑うことができなかつたと記述した者もあり、悲嘆の過程の中程に留まったまま動けないという印象を受けた²³⁾。「1か月も笑えなかつた」という、通常なら周囲の支援が最も必要とされる抑うつ的な段階においてもこの学生は自力で乗り越えなければならず、高2の経験であるにもかかわらず、「ま

だ実感できない時がある」とも記述している²⁴⁾。ところが、第5回に行ったグループワークの振り返りの記述に、この学生は「過去の死を振り返ることは避けてきたが、グループワークにより、自分の考えを分かち合い、泣くことができ楽になった」と述べ、同時に「友人の知らない一面を見たり、自分も他の人の話を聞けてうれしかった」と記述している。他の学生の振り返りにも、グループワークにより『気持ちの整理ができた、真剣に話せた、針が一本抜けた、ずっと語っていたかった』という記述が多くあり、死別当時感じた『悲しみ、別れ、恐怖、喪失感、後悔』を、身近な人に聞いてもらうチャンスが十分得られなかったことがわかる。このことから、初回のグループワークが、死別による悲嘆へのグループ・カウンセリング的なセッションになっていたことがわかる。身近な人の死について語ったり記述したりする方法は、多く取り入れられているが²⁵⁾、グループワークの目的（カウンセリングではない）を見失わないよう、導入前に、「話したくないことは話さなくてよい」「発言したくない人はパスしてよい」「非難をしない」「辛くなったらその場を離れてよい」などの、オリエンテーションをすることが必要であろう。また、必ず教員が各グループに入り、参加者一人ひとりが、「意見として」発言できる雰囲気を保つ必要があるだろう。涙を拭きながらも発言しようとするときは、むしろ自由にさせてよいと思う。また、教員は、傾聴することはもちろんのこと、時には支持的な言葉、たとえば、「辛かったね、でもね、おばあちゃん、きっとあなたの気持ち知っていたと思うよ」「そうだね、まだ、生きているのではないかって感じる時があるよね」などを使用する必要もある。たとえば、罪悪感の強い学生と、自分が感じていることに対して不安に思っている学生2名に対してかけた上述の言葉に対しては、2名ともが最終回の振り返りで、「安心した」という記述をしていた。さらにグループワークの振り返りでは、死別体験や悲嘆に共通性を見出し、自分だけではなかつたという安心感や、死について話してもよいことを感じただけでなく、人間は辛い体験を乗り越えて生きていくもの、人との関わりを大切にしたい、毎日を大切に生きたいなどの「生きること」の大切さ

の気づきを記述した者が多く、死を考えることにより命の大切さに気づくという目的は果たしていると思われる。Noppe & Noppe は、死の理解において多面性を持つ思春期にあるものたちと共に働く者が、彼らの自由に話す欲求やおとなが提供できる安全基地としての役目のバランスに配慮する重要性について触れ、討論やピアサポートがその一助となると述べている²⁶⁾。その意味で、話す勇気を支えつつ、安全面を考えながらこのようなグループワークを取り入れることは生と死を考えるプログラムにおいて重要な手段となる。年齢や対象の状況に応じては、グループワークのテーマや、プログラム中の位置に配慮することも必要であろう。

また、3つのグループの内、一つのグループは、グループワークの最後に死後の世界について、バズセッションのような形で話し合ったが、張り詰めていた緊張が取れ、時には笑いもあり、グループワークの感想として「この授業の面白さは、生とは、死後の世界はなど、答えがないこと」と記述した学生がいる。デーケン は、ターミナルケアにユーモアが必要なことを述べているが、さらに授業の中にもユーモアを取り入れている²⁷⁾。今回は意図したものではなかったが、プログラムの初日でもあり、緊張した雰囲気や和ませたり、安心させたりする必要があったと思われる。やはり、グループワークのテーマについてさらに検討を重ねていく必要があるだろう。

2. 絵本の読み聞かせの効果

絵本を使用したプログラム、絵本の読み聞かせは緒言に述べたように小中学生対象の生と死の教育の中ではよく使われる。今回使用した絵本は死を主要テーマとした絵本である。今回は死と関連する老い、生き物への愛情、死の準備、死別、死の受容、死後も残された人々の心の中や生活の中に故人の知恵や愛情が残ること、残された者たちの支え合いなど、絵本そのものに含まれたテーマの読みとり、生と死を考えるきっかけとすることのほかに、学生自身が将来、生と死の教育をする立場に立つことへの気づきや教材としての絵本の存在に気づくことをねらいとした。結果に述べたように、当日記述した感想からは、絵本の読み取

りや、絵本をきっかけに生と死を考えることはできていたように思われる。たとえば、「死がすべて終わりではないこと、生きている内にいろいろな人と関わりを持ち、教えあったり、様々な経験をしたりすることで人の心に残り、生きる支えになっていくのだ」、という感想や、「アナグマのように自分も誰かのために何かをしてあげられる人間になりたい」「アナグマのように旅行にでも出かけるようにトンネルの向こうにいけたら」というアナグマを生き方のモデルとした感想がある。また、祖母との死別の悲しみが整理されていないと記述した学生が、もぐらさんやカエルさんと自分を同一視して、「祖母に対する感謝の気持ちでいっぱいになり、絵本に励まされた」と述べている。しかし、後者のねらいに関する感想は、当日得ることはできなかった。感想記述の後に、死をテーマにした絵本の紹介と、自分たちが日々の保育の中で教える立場になることを話した。関連する絵本が数多くあることに、かなりの学生が興味を示し、手にとって眺めていた。最終プログラムでの絵本を用いたワークに対する振り返りでは、結果で述べたように、幼児に生と死をわかりやすく伝える必要性や、少数ではあるが、教える側のおとなが死を避けてはいけないという気づき、絵本の効果や使い方についての疑問や意見を記述した者がいた。絵本は子どもにおとなと同じようなインパクトや解釈を与えるものではない。「わすれられない おくりもの」は、年少児では長さのため飽きてしまう者もいる²⁸⁾。また、今回の対象者の中には、子どもの時わからなかった魅力がわかった、小学校の時読んだが印象が違くと述べた学生が何人かいた。教材として絵本が最適か吟味し、その上で絵本のテーマや内容を検討する必要があるだろう。絵本の選択は年齢だけではなく、個々の子どもの発達やコンテキストに配慮する必要があるだろうが、この部分の探求は今回の研究目的ではないので割愛する。また、今回の結果からは、絵本が自分の体験と重ねることが容易であり、学生の記述からも、おとなでも考えさせられる、心温まるなどが得られたことから、保育者養成校の生と死を考える試みにおいて絵本を使用することは、死について考えるきっかけとすることや、子どもに生死に関する教育をする立場として

の自分に気づくことにおいて、有効な手段と考えられた。

3. 教会学校教師（胎児教室主催者）および死別体験者の講演

畑野さん、鈴木さん両名の講演は、昨年の学生の記述から、多くの気づきが得られたことを確認したため、今年も引き続きプログラムの主要な部分とした。結果に述べたように、畑野さんの講演の感想には人柄に関する記述が多く、畑野さんが醸し出す若々しさやエネルギッシュな様子に加え、対象者と同じ年齢の時に保育者を目指していたということが昨年と同様、人生のモデルとの出会いとなっている。Hooper と Spilka が行った、大学生の死生観の調査では、死（終末としての死）についてのネガティブな構成概念として苦痛、孤独、未知、罰など、ポジティブな構成概念としては勇気や価値の表現があると結論づけている²⁹⁾。一般論で言えば学生たちよりも死に近いところにいると思われる80歳の高齢者が、生き生きとした姿で生きていることを学生たちに（凶らずも）示し、さらに自分の亡骸を教会学校の子どもたちに見せることが自分の最後の役割と述べたことにより、「母ちゃんのように、勇気を持って生き生きと生きていきたい」と学生が感じたことで、今後の彼らの死生観に何らかのポジティブな影響を与えるのではないだろうか。

死別体験者の話を聴くことは、上智大学で行われていたデーケンの「死の哲学」全25回のうち、第5回にも取り入れていた³⁰⁾。鈴木さんの講演からも昨年同様、多くの気づきが得られた。今年度も、鈴木さんの受けた衝撃や悲しみ、景子ちゃんの苦しさが伝わってきたという共感的な表現のほかに、景子ちゃんから講演を通じて学生自身が受け取った命の重みへの気づきを表現したものが多かった。今年度参加したある学生は誕生以前に、両親が鈴木さんと同様、子どもを病気で失う体験をしていた。そのため本学生は幼少の頃から死に対して強い不安を持っていた。この講演をきっかけに母親と長時間話すようになり、両親は学生のことを生命力の強い子どもとして生きぬくことを信じていたと聞かされた結果、死に対する大きな恐怖から解放され、さらに、自分を生んでくれた

ことへの感謝を両親に伝えたとのことである（内容掲載に関して本人および家族の許可済み）。このように、講演後に親と話をしたり、家族との関係を見直したいと希望したり、命を大事にしているか考えたいなど多くの変化が生まれた。また、今年度は、鈴木さんの、「絶対親より先に死んではいけない」という〈強烈なメッセージ〉に対する反応がとて多かった。中高年の自殺が問題にはなっているが、わが国では思春期・青年期は自殺が死因の中でも群を抜いている。男子では20～44歳の間は自殺が死因の第1位、女子では15～34歳まで第1位である³¹⁾。思春期は、たとえば、身体の成熟、新しい仲間関係の形成、結婚、出産、就職など一見豊かで、期待に満ちたでき事を経験し始める時期でもあるが、ある意味、それは子どもの体の喪失であったり、両親との古い愛着の喪失でもある³²⁾。また、家族や友達との社会的な関係の変化は成長の可能性と社会的な喪失という意味での「小さな死」の危険性を同時にはらんでいるとも言われている³³⁾。このようなことが思春期、青年期に自殺が多いことの要素となっているのではないだろうか。学生の第1回プログラムの問い4の回答の中に、人間関係で葛藤があり自殺を考えたことがある（プライバシー保護のため、表現を変えた）、と記述した学生がいたが、5回目の振り返りの中で、鈴木さんの言葉が胸にとても強く響いた、死ぬという選択はしないで歩んでいきたいと、自分への宣言でもあるかのように記述している。同様の事例をデーケンも記述している³⁴⁾。もちろん、この呼びかけはオールマイティではない。しかし、子どもを失った膨大な悲しみを昨日のここのように話した人が、正面切って率直に死んではいけないと呼びかけたことによって、多くの学生の心に「ドシン」と響いたのである。いわゆるエビデンスはない。しかし、学生の言葉があるのは事実である。やはり、このような講演を通し、自分の命を慈しむきっかけを作ることが必要である。

4. プログラム全体の評価

第5回で行ったプログラム全体への振り返りとして、現在の死生観について記述してもらったが、第1回のもものと比較した時に以下のようなことが

わかる。

結果に述べたように、初回の「死生観」にはネガティブな言葉として「恐くて仕方がない」「ぞっとする」「暗い」「人生を変えてしまう」などがあり、ポジティブな言葉としては「命を大切にしなければ」「いずれ来る死を受けとめることも大切」その他、死の普遍性は理解しつつも「死にたくない」などの記述がある。全体的に見ると、ネガティブな言葉の使用が非常に多かった。また「死ぬ時、自分の人生がすばらしかったと思えるよう生きて生きたい。しかし、一番大事なペットの死を想像すると、不安でそのことから逃げ、違うことを考えてしまう。まだ死について、考えることができない」というように、ある時は成熟した思考ができるが（――部）、ある時は「死」に対する膨大な恐怖に圧倒されてしまう（-----部）など、死の普遍性・不可逆性を認識しながらも思春期特有の死に対する緊張や葛藤が強い学生が多い印象を受けた。第 5 回プログラムにおける全体の振り返りでは、結果に述べたように、恐怖に関する記述はなく、死は辛く悲しいものであると認めつつも、命を大切にすること、感謝すること、生死について考えることの必要性、死が終わりではないこと、生死について子どもたちに伝えるものがあることなどポジティブな死生観に変化していることがわかる。「死を考えることは難しくて面白い。これから生きていつか死んでいくが、死を恐れなくて、今のこの時間、一日一日を大切に生きていきたい。」と記述した学生がいるが、これは、デーケンでもなく、カール・ベッカーでも日野原の言葉でもなく本学学生の言葉である。さらに、デーケンは人生を締めくくる 6 つの課題の一つに感謝の表明を挙げている³⁵⁾。多くの学生が命をいただいたことへの感謝、今、生きていることへの感謝、講演者への感謝、両親への感謝を述べている。本プログラムの目的は「死」について考えるきっかけを作ることではあったが、かなり深い思索をした学生が多いように感じられた。

このように、グループワーク、絵本の読み聞かせ、2 つの講演、そして振り返りの記述によって、死を考える動機付けをするということのおおよその目的を達成したのではないかと考える。今回参加した学生は有志だったため、もともとこのよう

な試みに積極的な姿勢を持っていると思われるが、継続や必修科目としての導入を希望している学生もいるため、次の段階として、多くの死の準備教育で取り上げているような、たとえば、死の定義・死へのプロセス^{36, 37)}・悲嘆³⁸⁾のプロセス・日本人の死生観・自殺の問題・臓器移植・ホスピスケア・緩和ケアなどについての教育を実施していく必要があるだろう。さらに保育者養成校においては、子どもの死生観の発達、子どもに生と死を教えることの意味、教材としての絵本研究などの内容が必要なのではないか。

日野原は、『死をみつめ、今を大切に生きる』において、テロや戦争について触れ、「これからは、一人一人がもっと力を合わせて、人間の命を大切に作る世紀を作っていかなければなりません。……中略……命を大切にするという根源のところに立ち返らなければならないのです。」と述べ、21 世紀に人間が向かわなければならない方向性を示唆している³⁹⁾。謙虚に自分たちにできることを検討していくべきだろう。

講演を快く引き受けてくださった畑野寿子さん、鈴木中人さんに心よりお礼を申し上げます。また、この試みに積極的に参加してくれた本学学生、ならびにサポートしてくださった卒業生の谷修子さんに心から感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 児童の問題行動対策重点プログラム（最終まとめ）。閲覧日 2005 年 9 月 3 日、
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/10/04100501/001.htm
- 2) 日本保育学会 第 58 回大会発表論文集、2005 年 5 月。
- 3) 尾上明子・中根淳子「生と死を考える試み―保育者養成において―」『名古屋柳城短期大学紀要』26 号、2004 年、49-65 頁。
- 4) 兵庫・生と死を考える会・「生と死の教育」研究会『幼児・児童の死生観についての発達段階に関する意識調査』兵庫・生と死を考える会、2003 年、14 頁。
- 5) 工藤真由美「子どもにいのちの大切さ・死の問題を教えるということ―ダナ・カストロを手がかりにして―」『四條畷学園短期大学研

- 究論集』37号、2004年、50頁。
- 6) 大瀬敏昭『輝け！いのちの授業』小学館、2004年、42-47頁。
- 7) スーザン・バーレイ作・絵『わすれられないおくりもの』小川仁央訳、評論社、1986年
- 8) 医師薬コース特別講演：生きることの喜びと意味を考える 聖路加病院小児科部長 細谷亮太先生。閲覧日 2005年9月3日、
<http://www.gis.ac.jp/topics/hosoya.html>
- 9) 古田晴彦『「生と死の教育の実践」一兵庫・生と死を考える会のカリキュラムを中心に』清水書院、2005年、78-81頁。
- 10) 佐野洋子作・絵『100万回生きたねこ』講談社、1977年。
- 11) 中央教育審議会における有識者からの意見陳述の概要：日野原重明氏（聖路加国際病院理事長）の意見陳述の概要（中央教育審議会第19回基本問題部会（平成14年12月17日）より）。閲覧日 2005年9月3日、
http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/voice/001/v001_02.htm
- 12) Leo Buscaglia. (1982). *The Fall of Freddie the Leaf*. New Jersey: Slack Inc.
- 13) レオ・バスカーリア作、島田光雄絵『葉っぱのフレディー—いのちの旅—』みらいなな訳、童話屋、1998年。
- 14) 9) に同じ。103頁。
- 15) Risa S. Yaffe., Troy Cramer (illustrations). (1998). *Once Upon a Hopeful Night*. The Oncology Nursing Press.
- 16) 3) に同じ。63頁。
- 17) アルフォンス・デーケン『生と死の教育』岩波出版、2001年、151-162頁。
- 18) 得丸定子「第1章 学校で「死」を教える」『生と死のケアを考える』カール・ベッカー編著（17-44）、法蔵館、2000年、26-32頁。
- 19) アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか』NHK ライブラリー、1996年、90-98頁。
- 20) カリフォルニア開発的カウンセリング協会編『クライシス・カウンセリング ハンドブック』国分康孝他監訳、誠心書房、2002年、106頁。
- 21) 19) に同じ。232-238頁。
- 22) Corr, C. A. (1995). Entering into adolescent understandings of death. In Earl A. Grollman (Ed.) *Bereaved children and teens: A support guide for parents and professionals* (21-35). Boston: Beacon Press. 25
- 23) 19) に同じ。61頁。
- 24) 17) に同じ。64頁。
- 25) 17) に同じ。158頁。
- 26) Noppe, L. D. & Noppe, I. C. (1996). Ambiguity in adolescent understandings of death. In Corr, C. A. & Balk, D. E. (Eds), *Handbook of Adolescent death and bereavement*. (25-41) Springer Publishing, New York. 40-41
- 27) 19) に同じ。278-297頁。
- 28) 光岡攝子他「絵本の読み聞かせによるデスエデュケーションの試み」『小児保健研究』5号、2003年、572頁。
- 29) Hooper, T., & Spilka B. (1970). Some meaning and correlates of future time and death among college students. *Journal of Death and Dying*, 1, 55.
- 30) 17) に同じ。162-167頁。
- 31) 第1-28表 性・年齢階級別にみた死因順位 1) (第5位まで)。閲覧日 2005年9月15日、
<http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/youran/data16k/1-28.xls>
- 32) 27) に同じ。28頁。
- 33) 21) に同じ。29頁。
- 34) 19) に同じ。110-111頁。
- 35) アルフォンス・デーケン「生と死の文化を考える」『死をみつめ、今を大切に生きる』日野原重明編著（185-205）、春秋社、2002年、201頁。
- 36) E・キューブラー・ロス『死ぬ瞬間』川口正吉訳、読売新聞社、1971年。
- 37) 17) に同じ。12頁。
- 38) 17) に同じ。61-68頁。
- 39) 日野原重明「いのちの旅 人はどこから来て、どう行き、どこに行くのか」『死をみつめ、今を大切に生きる』日野原重明編著（3-45）、春秋社、2002年、44頁。

「死をテーマにした絵本」

出版年順

| No | 書名 | 出版年 | 文 | 絵 | 出版社 |
|----|--------------------|------|----------------------------------|-------------------|----------|
| 1 | かたあしだちょうのエルフ | 1970 | おのき かく | | ポプラ社 |
| 2 | かわいそうな ぞう | 1970 | 上家 由岐雄 | 武部 本一郎 | 金の星社 |
| 3 | ひさの星 | 1972 | 斉藤 隆介 | 岩崎 ちひろ | 岩崎書店 |
| 4 | 100万回生きたねこ | 1977 | 佐野 洋子 | 佐野 洋子 | 講談社 |
| 5 | かあさんのうた | 1977 | 大野 充子 | 山中 冬児 | ポプラ社 |
| 6 | ぼくはねこのバーニーがだいすきだった | 1979 | ジュディス・ボースト なかむら たえこ (訳) | エリック・ブレグバック | 偕成社 |
| 7 | ひろしまのピカ | 1980 | 丸木 俊 | | 小峰書店 |
| 8 | ちいちゃんのかげおくり | 1983 | あまん きみこ | 上野 紀子 | あかね書房 |
| 9 | ことりのいのち | 1984 | アロナ・フランケル さくま ゆみこ (訳) | | アリス館 |
| 10 | おじいちゃん | 1985 | ジョン・バーニンガム 谷川 俊太郎 (訳) | | ほるぶ出版 |
| 11 | わすれられないおくりもの | 1986 | スーザン・バーレイ 小川 仁央 (訳) | | 評論社 |
| 12 | おばあちゃん | 1987 | 大森 真貴乃 | | ほるぶ出版 |
| 13 | せかいいちゆうめいなフレッド | 1988 | ポージー・シモンズ かけがわ やすこ (訳) | | 佑学社 |
| 14 | ずーとずーとだいすきだよ | 1988 | ハンス・ウィルヘルム 久山 太市 (訳) | | 評論社 |
| 15 | おじいちゃん | 1990 | マーク・ジュリー ダン・ジュリー 重兼 裕子 (訳) | | 春秋社 |
| 16 | こころのなかのおじいちゃん | 1990 | モニカ・ギーダー きたざわ きょう (訳) | マッツ・アンダーソン | アーニ出版 |
| 17 | かえるくんととりのうた | 1991 | マックス・ベルジュイス 清水 奈緒子 (訳) | | セーラー出版 |
| 18 | 真昼の星 | 1991 | 岡本 綾子・万里子 | | いのちのことば社 |
| 19 | マッチ売りの少女 | 1992 | H・C・アンデルセン 木村 由利子 (訳) | いわさき ちひろ | 偕成社 |
| 20 | わすれないよ、おばあちゃん | 1992 | ボンダ・ミショー・ネルソン 老齡j健康科学研究財団 (訳) | キマーヌ・ウーラ | 日本評論社 |
| 21 | のにっき (野日記) | 1993 | 近藤 薫美子 | | アリス館 |
| 22 | アニーとおばあちゃん | 1994 | ミスカ・マイルズ 北面ジョーンズ和子 (訳) | ピーター・バーノール | あすなる書房 |
| 23 | おばあちゃんがいるといいのにな | 1994 | 松田 素子 | 石倉 欣二 | ポプラ社 |
| 24 | ゆずちゃん | 1995 | 肥田 美代子 | 石倉 欣二 | ポプラ社 |
| 25 | ふたばあちゃん | 1995 | マーガレット・ワイルド 今村 葦子 (訳) | ロン・ブルックス | あすなる書房 |
| 26 | おどるねこネリー | 1995 | ナタリー・バビット たなか まや (訳) | | 評論社 |
| 27 | おじいちゃんのお口笛 | 1995 | ウルフ・スタルク 菱木 晃子 (訳) | アンナ・ヘグルンド | ほるぶ出版 |
| 28 | 天使のおともだち | 1995 | キューブラー・ロス 伊藤 ちぐさ (訳) | 金子 千晶 | 日本教文社 |
| 29 | 大きな木のおくりもの | 1996 | アルビン・トレッセルト 中井 貴恵 (訳) | アンリ・ソレンセン | あすなる書房 |
| 30 | 月にとんだ猫 | 1996 | 森津 和嘉子 | | 文溪堂 |
| 31 | マローンおばさん | 1996 | エリナー・ファージョン 安部 公子/茨木 啓子 (訳) | エドワード・アーディ ゾーニ | こぐま社 |

生と死を考える試み

| No | 書名 | 出版年 | 文 | 絵 | 出版社 |
|----|---------------------------|------|------------------------------------|-----------------|------------------------|
| 32 | ミッフィーのおばあちゃん | 1997 | ディック・ブルーナ 角野 栄子 (訳) | | 講談社 |
| 33 | さよならっていわせて | 1997 | ジムとジュアン・ボウルディン きたやま あきお (訳) | | 大修館書店 |
| 34 | 「死ぬ」ということ | 1997 | ビート・サンダース 山本 直英 (訳) | | ポプラ社 |
| 35 | おねえちゃんは天使 | 1997 | ウルフ・スタルク 菱木 晃子 (訳) | アンナ・ヘグルンド | ほるぷ出版 |
| 36 | おばあちゃんのはねまくら | 1997 | ローズ・インベイ 佐藤 見果夢 (訳) | ロビン・ベル・コーフィールド | 評論社 |
| 37 | まんげつの海 | 1997 | 梅田 俊作 | 梅田 佳子 | 佼成出版社 |
| 38 | 葉っぱのフレディ | 1998 | レオ・バスカーリア みらい なな (訳) | | 童話屋 |
| 39 | いのちの時間 | 1998 | ブライアン・メロニー 藤井 あけみ (訳) | ロバート・イングベン | 新教出版社 |
| 40 | いつでも会える | 1998 | 菊田 まりこ | | 学習研究社 |
| 41 | 「死」って、なに？ | 1998 | ローリー・クラスニー・ブラウン 高峰 あづさ (訳) | マーク・ブラウン | 文溪堂 |
| 42 | さよなら、ありがとう、ほくのともだち | 1998 | 河原 まり子 利岡 裕子 | | 岩崎書店 |
| 43 | ポケットのなかのプレゼント | 1998 | 柳澤 恵美 | 久保田 明子 | ラ・テール出版局 |
| 44 | Once Upon a Hopeful Night | 1998 | Risa Sacks Yaffe | Troy Cramer | Oncology Nursing Press |
| 45 | どこにいるの、おじいちゃん？ | 1999 | アメリー・フート 平野 卿子 (訳) | ジャッキー・グライビ | 偕成社 |
| 46 | ダギーへの手紙 | 1999 | E・キューブラー・ロス アグネス・チャン (訳) | はらだ たけひで | 偕成出版社 |
| 47 | でんでんむしのかなしみ | 1999 | 新美 南吉 | かみや しん | 大日本図書 |
| 48 | みどりののはらであそぼうよ | 1999 | マーティン・ワッデル 山口 文生 (訳) | バーバラ・ファース | 評論社 |
| 49 | ほくのいのち | 1999 | 細谷 亮太 | 永井 素子 | 岩崎書店 |
| 50 | 天国からやってきたねこ | 2000 | 河原 まり子 | | 岩崎書店 |
| 51 | 「生と死」について考えよう | 2001 | 鈴木 康明 (監修) | | 学習研究社 |
| 52 | さよなら エルマおばあさん | 2000 | 大塚 敦子 | | 小学館 |
| 53 | おじいさんの旅 | 2002 | アレン・セイ 大島 英美 (訳) | | ほるぷ出版 |
| 54 | おじいちゃん わすれないよ | 2002 | ベッチェ・ウェステラ 野坂 悦子 (訳) | ハルメン・ファン・ストラテン | 金の星社 |
| 55 | いのちがおわるとき (全5巻) | 2002 | 種村 エイ子 (監修) | | ポプラ社 |
| 56 | おばあちゃんは木になった | 2002 | 大西 暢夫 | | ポプラ社 |
| 57 | ペッレと二枚のでぶくろ | 2003 | カーリ・ヴィンイエ、イングリット・アスケ (訳)、見玉 千晶 (訳) | ビビアン・ザール・オルセン | イーブック出版 |
| 58 | レアの星 — 友だちの死 — | 2003 | パトリック・ジルソン 野坂 悦子 (訳) | クロード・K・デュボア | くもん出版 |
| 59 | おにいちゃんがいてよかった | 2003 | 細谷 亮太 | 永井 素子 | 岩崎書店 |
| 60 | 岸辺のふたり | 2003 | マイケル・デュドク・ドウ・ヴィット うちだ ややこ (訳) | | くもん出版 |
| 61 | 千の風になって | 2004 | 新井 満 | 佐竹 美保 | 理論社 |
| 62 | さよなら、マフィンさん | 2004 | ウルフ・ニルソン 水野 綾子 (訳) | アンナ=クララ・ティードホルム | 主婦の友インフォス情報社 |
| 63 | おじいちゃんと森へ | 2004 | ダグラス・ウッド 加藤 則芳 (訳) | F・J・リンチ | 平凡社 |
| 64 | 悲しい本 | 2004 | マイケル・ローゼン 谷川 俊太郎 (訳) | クエンティン・ブレイク | あかね書房 |

Exploring Life and Death

— Trial Educational Sessions for the Early Childhood Education Students 2 —

Onoe, Akiko*

Nakane, Junko*

Many of the Early Childhood Education (ECE) students at Ryujō College will become educators of young children, who are in the process of learning that death is universal and inevitable. Last year the authors of this paper presented a series of trial educational sessions titled "Exploring life and death" to the ECE students. At the end of the sessions some changes in the students' views on life and death were noted. However, there were no indications that the students realized that they would be in a position to educate young children about life and death. Therefore, in addition to a questionnaire, group work and lectures given by bereaved persons, the authors programmed this year's sessions to include opportunities for the students to experience reading picture book about death to young children and to examine various picture books about life and death. The feedback from the students seems to suggest that this year's program enabled them to realize that in the future they would be in a position to educate young children about life and death. As the students explored death through the five sessions, they seemed to have come to realize how precious life is and they no longer expressed their fear about death. Thus, it may be said that the students were developing more mature views on life and death as a result of this year's sessions.

キーワード : *training of early childhood educators (保育者養成), life (生), death (死), views on life and death (死生観), picture books (絵本)*